

ピエール・プレヴォにおける道徳哲学と経済学

中宮 光隆

はじめに

I プレヴォによるD. ステュアートとマルサスの仏訳書

II 「マルサス『人口論』の若干の考察」

III 1810年代のプレヴォ

おわりに

はじめに

筆者は前稿（「ピエール・プレヴォの生涯と業績」『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号、2010年3月）で、ピエール・プレヴォ（Pierre Prévost, 1751-1839）のバイオグラフィを、またそれ以前の諸稿（たとえば「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号、2009年3月等）で、シスモンディと彼の思想形成に影響を与えたと思われる人々の概観を扱った。本稿の課題は、ピエール・プレヴォの著作活動のうち経済学や道徳哲学に関する論考の検討を通じて、彼の思想の一端を明らかにすることである。

前稿でも述べたように、プレヴォは熱や光、それに引力など物理学や天文学に関する多くの著作を残している。しかし彼は自然科学のみならず、青年期に神学や法律学を学び、また道徳哲学にも深い関心を寄せていた。また彼は、D. スチュアートやマルサスをはじめとする経済学の著作の仏語訳を刊行するなど、学問・科学の広い領域にわたる深い知見を有していた。彼の著作や翻訳は、ジュネーヴだけでなくヨーロッパの多くの人々に影響を与えたことは容易に推測できるが、他方、彼の生涯を振り返るならば、彼自身もスコットランドやイングランド、それにフランスやプロシヤ等の思想家や政治家から、種々の知見や思想を吸収しているに違いないことが理解できる。

本稿ではプレヴォが『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に寄稿したD. スチュアートやマルサスの翻訳への序文と、マルサス人口論への注解を中心に、それらについての短い概要を論述しているパッペの論文を参考にしつつ、プレヴォの道徳哲学および経済学とその思想的基盤を検討したい。ただし、筆者は『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に掲載されたプレヴォの論文のすべてを入手しているわけではないので、本稿はその中間報告にすぎないといわざるを得ない。

I プレヴォによるD. スチュアートとマルサスの仏訳書

熱や重力といった物理学に関する多くの著作を残したピエール・プレヴォは、けっして自然科学の分野にのみ関心を抱いていたのではない。彼は道徳哲学や経済学に関しても少なからざる著作や翻訳を發表している。それらのいくつかは『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に掲載されたし、また単行本として出版もされた。単行本のひとつはデュガルト・ステュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) の *Element of the Philosophy of Human Mind* の翻訳で1808年にジュネーヴで刊行された *ÉLÉMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L'ESPRIT HUMAIN. Par Dugald STEWART, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST*¹⁾ であり、も

うひとつは T. R. マルサスの『人口論』の翻訳で1809年に刊行された *ESSAI SUR LE PRINCIPE DE POPULATION, OU Exposé des effets passés de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux quelle entraîne. Par T. R. Malthus, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST* である。さらに単行本にはなっていないが、プレヴォは『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に論文「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」(QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION) を発表しているし²⁾、1806年に発行された同誌の31巻に収録されているファergusンの Principles of moral and political Science からの抄訳もプレヴォによる翻訳と思われる³⁾。

カンドルは、プレヴォは D. ステュアートに、1792年にたった1回しか会っていないにもかかわらず、その後の活発な手紙のやりとりによって両者の間は本物の友情で結ばれていたと指摘している⁴⁾。実際、両者の関係は親密であったことが、翻訳単行本にプレヴォが寄せた訳者序文からも分かる。その中でプレヴォは、この翻訳には D. ステュアートは何ら手を加えていないこと、しかし「彼との文通や交友関係を持っている」ので問題はないという趣旨のことを述べている⁵⁾。その上でプレヴォは、D. ステュアートがプレヴォにこの翻訳の出版を勧めたこと、そして「一刻も早くそれを実行したかった」理由として「単に私が著者や著作を評価しているからだけでなく、それが私の講義の一部分で私に手引き書を提供したからである」⁶⁾と述べ、そこに付した注で1804年にジュネーヴのパシューから出版した自分の著書『哲学論集』を参照するよう指摘している。プレヴォは D. ステュアートの理論を自分に取り込み、それを原著や講義に利用するまでに評価していたことが分かる。

とはいえプレヴォは、D. ステュアートと「唯一」異なる見解を持っていることも訳者序文で述べている。それは自然科学と道徳哲学との関係である。彼は

次のように述べている。

「しかしながら私は著者の見解のすべてに賛成したいと暗に考えているわけではない。私はこの翻訳で、彼の考えを忠実に表現するよう自分に課した。そして私が彼（の考え）に一致しないと分かるような希な場合にも、私の考えを彼に対置しなければならないとは思わなかった。その唯一の例を示そう。著者 [D. ステュアート（一筆者）] は重力の原因やメカニズムの探求を健全な哲学に反することとみなしている。この点に関する G. L. ル・サージュ (Le Sage) 氏によって始められ、果たされた業績を理解している人は、そのような探求は最も厳密な哲学的方法と矛盾しないということを知っている。私がデュガルト・スチュアート氏と完全に一致しているのは、この個別の基準に関係する一般的規範 (règle) に関してである。」⁷⁾

物理学など自然科学を修めて多くの著作を持ちながらもさらに社会科学の分野についても憧憬が深かったプレヴォが、この点で D. ステュアートを不満に思うのは理解できる。しかしながらこれはむしろ末節のことである。むしろ重要なことは、特定の見解よりも大局的な思想において D. ステュアートに「完全に一致」しているとプレヴォが認識していることである。

一方、1809年に出版されたマルサス『人口論』⁸⁾ 翻訳書に付したプレヴォの訳者序文は短いものである。ここでもプレヴォは、その翻訳を著者マルサスから勧められたと述べている。すでに『ピブリオテーク・ブリタニク』誌に発表された『人口論』の仏語抄訳を読んだマルサスが、「私 [プレヴォ] がその諸原理をよく理解していること」が分かり、「私が必要と判断する変更を加えることを相応に許可することまでした」⁹⁾ という。しかしプレヴォは「この許諾を乱用するようなことはしない」¹⁰⁾ で、マルサスが出版したままの内容を伝えるよう努めたとしつつも、補遺に関しては若干の軽微な修正を施し、また主要な主題から逸れたりイギリスに固有の問題と思われる箇所や章に関しては削除したと述べている。ここまではたんなる説明にすぎないと見て良さそうであるが、

われわれにとって興味深い点は、この叙述に続くくだりである。すなわち、プレヴォは以下のように述べている。

「最近の事情から、私は、イギリスの救貧法に関連する議論の大部分を翻訳せずにはいられなかった。まず第一の理由は、やや特殊とはいえ、テーマが非常に興味深いものであったからであり、次にこの議論が議会の救貧委員会 (comité de mendicité de l'Assemblée) に提案され、同委員会によって賢明にも否決された様に、軽率な模倣を警告するのに役立つことができるからである。」¹¹⁾

この時期にすでにプレヴォは、救貧法に関連するテーマに関心を寄せていたことが伺える。ただし、この短い序論の叙述の限りでは、彼が貧困や救貧法に対してどのように考えていたか、いかなる姿勢を取ろうとしていたかは明白ではない。委員会の「否決」を「賢明」だと表現する意味、あるいは「軽率な模倣」は何を指しているか、その「警告」は何に向けてのものか等も確認できない。そしてこの書の本文はマルサス『人口論』の翻訳であるから、これらの疑問を解く鍵は他の著述に求めるしかないであろう。

II 「マルサス『人口論』の若干の考察」

プレヴォは1816年に発行された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌31巻に「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」を寄せた。比較的長編のこの論文は、この時期のプレヴォの人口や貧困に関する見解を理解する上で不可欠である。

この論文の冒頭でプレヴォは、マルサスの考え方を要約している。

「マルサス氏の人口論の最終的な結論は、貧者の結婚は奨励されるべきではない、ということである。その理由は、人口は生活の糧に依存するということである。というのは、人口はそれ自身、生活の糧よりもはるかに急速

に増加する。したがって、人口は必然的に何らかの障害によって阻止され、その水準にとどまる。しかし、飢饉や戦争や疫病といった破壊的な障害は、致命的な惨禍として避けられなければならない。その諸前例が多くの分野で破壊的な力を発揮している悪習や窮乏が、さらに一層災いをもたらしている。したがって、貞節や社会的幸福と矛盾のない諸手段、すなわち子どもの境遇が確実ではないような結婚を思いとどまらせること、また近代国家においてそもそも人々が服するよう仕向けられる慎慮の動機を強めることによって、人口（増加）を予防する障害を効かせることが有効であろう。窮乏や悪習はそれらが最も普遍的な様相を帯びたものである。

このすべての理由は以下の2命題に帰される。

人口は食糧に依存する。

したがってその過剰を予防する必要がある。¹²⁾

このようにマルサス人口論の骨子をまとめたのち、プレヴォは、この2命題のうち第1のそれはよく知られているが、第2のそれはあまり主張されていないどころか、「幾人かの著者はどのような種類の障害でも人口に対立させるのは政策上の誤りであると考えているようにすら思われ」とし、その一例としてルソー（Rousseau, Jean-Jacques）を批判的に引き合いに出している。

ここでのプレヴォによるルソー批判は、「ルソーは人口を幸福の温度計にした」¹³⁾との一点に集約される。プレヴォは、ルソーが『社会契約論』のなかで「正確な尺度に欠ける道徳の量を、その特徴に合わせて、どうやって算定するのだろうか？」との疑問を投げかけたうえで、ルソーの以下の主張を明らかに批判的に引用している。すなわち、「私[ルソー]としては、単純な徴証 (signe) が正しく評価されないとか不適切な間違った信念を持たれることに、いつも驚かされている。政治的協調の目的は何だろうか？ それは構成員の維持と繁栄である。構成員が維持され繁栄するもっとも確実な徴証は何だろうか？ それは彼らの人数、人口である。したがって、そう議論される特徴を他に求めよう

としてはならない。他はすべて同じであっても、その政府のもとでは、外国人の財力がなく、帰化がなく、植民地がなくても、市民にあふれ、さらに増加するような、そのような政府が間違いなく最良である。その政府のもとでは国民が減少し滅亡するような、そのような政府は最悪である」¹⁴⁾と。ルソーのこの叙述に対してプレヴォは以下のように批判している。

「これら様々な表現には、疑いもなく多くの真理があるとともに、そこでの誤謬は混乱し絡み合っていて、見抜くのにやや骨が折れる。しかしながら結論に注目するならば、ルソーは明らかに政府の良さの尺度を与えるものは数であって幸福ではないと、すなわち多くの事実によっても、またいい意味の単純な知識によっても否定され、気取りも豪華さもないこの目的に適応された主張であるということが解る。」¹⁵⁾

ここに見られるように、プレヴォは、ルソーが社会や政府の状況の善し悪しの尺度を単に人口の多さに還元していることを批判しているのであるが、そこには二つの論点が表現されている。ひとつはもちろん人口だけが尺度ではないということであるが、それだけではなく、さらに「幸福」が尺度だとしている点である。人口が多ければよいということではなく、人々がどのような生活をしているか、その内容が問題だとプレヴォは考えているのである。同様の主張は、続けてミラボー（Mirabeau, Victor Riquetti, Marquis de）の『人間の友』を引き合いに出してなされている。プレヴォは次のように主張する。

「ミラボーはおおよそのところ『社会契約論』の著者と同じ見解を表明している。彼は、最大の情熱を込めて、あえて不都合を問題にするようなことを望まずに、人口の利点を賞揚している。

『人間の友』(Ami des hommes)の序文のあと、彼は、人間を広い視野からみたいと願い、人間に過度に多くのことを詰め込む計画に反対する卑劣な快樂主義者(épicurien)しかいないと考えているように思われる。この著作の第2章はこのフレーズで始まる。『人口がひとたび社会の第1の富

として認められると、それはどこから引き出すのかとか、その種の富を得る手段を知ることが問題になる。』—この著者がそのタイトルにもとづいておおいに賢明に答える問題は、生活の糧の尺度は人口の尺度であることを知ることである。—しかしながら、それでもなお彼は富の第1に人口をおいている。もし社会的つながりが非常に多数の人間にとって窮乏の不変の原因にはならないことが期待されているとしても、戦い疲れてはならない誤謬。人口は疑いもなく非常に大きな富である。そして生活の糧と比較して遅くて漸進的なその増加は止められるべきでは決してない。しかし、（『人口論』の著者がとてもしばしばたきこんでいるように）各人が生活することができ、そしてなおまず何らかの愉楽を楽しむことができるところで発展を止める必要がある。望ましい富として考慮されるべきものは、この愉楽であり、実生活で求められる人々の幸福であって、不幸を運命づけられあるいは存在感を味わうことができる前に死に至る子どもの無制限な出産ではない。』¹⁶⁾

ここではプレヴォの主張は明瞭である。この点でのルソー批判と同様に、人口こそが富であるとかその際限のない増加のみを称えることは誤りであるとミラボーを批判している。人々は愉楽を楽しむことができなければならない。望ましい富は愉楽であり、実生活で求められる人々の幸福である。これがプレヴォの主張の第1の論点である。それだけではない。「生活の糧の尺度は人口の尺度であることを知らなければならない」。すなわち、人口は生活の糧の量に依存するのであって、その逆ではない。これがプレヴォの主張の第2の論点である。そしてこの点で、プレヴォはマルサスと軌を一にするのである。

さて、「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」におけるこれ以降のプレヴォの叙述（脚注を含む）は、どうすれば生活の糧の生産が増加しうる範囲に人口の増加を抑制することができるかという課題に対する、数人の著者の議論に関する検討に充てられている。まずガルニエ（Garnier,

Germain) の『経済学原理要論』(*Abrégé Élémentaire des principes de l'économie politique*, 1796) が採りあげられ、「人口と文化との関係、人口と生活の糧とのあいだに生じる依存関係をまったく正確に規定した」と評価している¹⁷⁾。続いてプレヴォは、セー (Say, Jean-Baptiste) の『経済学概論』(*Traité d'économie politique*, 1803) における議論を紹介して、「セー氏もまた、人口がつねに生産量に比例することを証明し、多数の権威者によってこの意見を確認している。彼は人口原理にふれる以下の注釈をそれに付け加えている。『生産を促進することでは人口を増加させることはできない。』」と述べている¹⁸⁾。しかしながらガルニエもセーも、プレヴォは簡単にしか触れていない。

それに対して J. スチュアート (Steuart, James. プレヴォは James Stewart と綴っている) に関してはやや詳細に論述されている。「おそらく他の著述家たちは、もはやそれに力点を置かなかつたし、ジェームズ・ステュアート以上に人口論に接近して来なかつただろう」¹⁹⁾ と彼は考えるからである。プレヴォがここで対象にしているのは、J. スチュアート『経済の原理』(*An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767. 仏訳 *RECHERCHE DES PRINCIPES DE L'ÉCONOMIE POLITIQUE.*) 第1編の第12章から第17章、すなわち人口増加(増殖・出産) およびそれと統治や階級それに農業生産との関係と、第21章の「第1編の要約」である。プレヴォが J. スチュアートから引用している箇所は、まず、あらゆる階級の住民に結婚を勧めることに対する批判、子供を養育することができない両親から生まれた子とその親の悲惨な結末に対する警告である。プレヴォ自身の叙述からは、彼は J. スチュアートのこの主張に理解を示しているように読める。プレヴォは以下のように述べている。

「彼は単なる出産と現実の増殖 (multiplication) と区別している。[… (J. スチュアートからの引用を省略) …]

結論として J. スチュアートは、統治者に、単なる出産のための結婚を禁じることによってこれらの悪を予防することを強く勧めている。そのため

に彼は知識人たち (lumières) に取り巻かれ、社会を構成する様々な階級の人口と通常の徴兵手段の状態を正確な調査によって手に入れることを望んでいるのである。彼は彼の力が及ぶ一般的な結果に満足していないが、彼の考えを理解させるためにそれらを使っている。彼は人口の非常に急速な増加を心配しているのに、他の政治家たちはそれらの諸結果を心配することなど考えてもいないように思われる。」²⁰⁾

つぎに、J. スチュアートの第13章からは、長い引用がなされている。しかし注目すべきことは、プレヴォがその途中で第12章の最後の一文 — 「私は自由の愛好者として、結婚への新たな制限を勧めるようなことはしない。そもそも制限は、われわれの世紀を支配する精神にまったく反している。」 — を引用していることである。そしてプレヴォは、このJ. スチュアートの叙述に以下のコメントを付けている。

「もし彼が現代人たちに敬意を払うことも、また根強く普及した意見を尊重することも考えなかったならば、彼は多分もっと極端に走っていただろう。」²¹⁾

さらに、プレヴォは、J. スチュアートの第14章から、多数の人々の命を奪う病気も人口減少をもたらすことにはならないという一節と、第17章の穀物生産と人口の関係に関する箇所を、J. スチュアートによるこの章の結論とも言える最後の部分 — 「したがって私の意見では、人口は食糧に比例しなければならないし、それは均衡がほぼ達成されるまではけっして止まらないのである。」 — まで含めて引用している。

J. スチュアートからの引用の最後にプレヴォは、第1編の要約である第21章の叙述から、そのなかの第12章と第15章に関する記述の一節をとりあげている。まず第12章の要約でJ. スチュアートの「人間は増殖をやめることはできないが、それはちょうど木が生育をやめられないのと同じである。しかし生きることができるのは、栄養が与えるばあいではない。他方で、生活の糧の増加は結局

止まらざるを得ないから、そうなるやいなや、人口増加は止まる。すなわち死亡する人々の割合が年々増大する」との叙述にたいするプレヴォの以下の主張が興味深い。

「この著者 [J. スチュアート] が人口を扱う編の要約には注目すべき一節、マルサス氏が人口論と呼ぶものがもっとも明瞭に述べられている箇所のひとつがある。」²²⁾

また第15章の要約部分でプレヴォは、J. スチュアートが「次に私はこれらの一般的原理をブリテンの諸島における人口の状態に関する個別の状況説明に適用する。そこで私は以下のように結論づける。そこで人口の障害になっているのは、戦争や貿易によって被った損失に依ってでもなく、食糧の輸出でもなくて、現在この国を人口増加の道徳的不可能状態においているこの国の政治状況によってである」と主張している箇所を引用したあと、次のように述べている。

「マルサス氏は、J. スチュアートが自分の後に執筆する人に要望していたように思われることを成したのだと言うことができる。」²³⁾

J. スチュアートからの引用とそれにたいするプレヴォのコメントはここまでで、論文「若干の考察」は爾後、プレヴォ自身の見解の叙述に充てられている。そこでプレヴォは、人間生活における家族の重要性と芸術作品などに見られる「感性の刺激」という「好ましくない傾向」を指摘した後、人口抑制に関する誤った見解を批判している。彼が批判の対象にしているのは、『*Medical and physical Journal*』誌1804年4月号に掲載された（とプレヴォが脚注で示す）慈善活動家（PHILANTHROPUS）と署名されたあるジャーナリストに宛てられた手紙である。この慈善活動家の主張は、将来に向かって生活の糧の増加は緩慢でしかないのだから人口抑制が絶対に必要であることを主張し、この点では「マルサスの諸原理」を取り込んでいるように見えるけれども、こともあろうに種痘が好都合というよりも有害であると主張している点である。これに関連してプレヴォは以下のように述べている。

「ここでこの手紙の筆者は、ひどく貧しい階級の幸福は労働の高価格に依存し、労働の高価格は労働者数に規制されると述べている。私は、天然痘感染以来、その被害にさらされるのはとりわけ労働者階級であるということをつけ加える。なぜなら、より豊かな階級はその予防を行使する階級だからである。そこから、もしこの破滅の原因を取り除くことになれば、労働者たちは過度に多量になるし、労働はその価格を低下させることになるだろう、そして困窮が一般的になるだろう、ということが結論づけられる。」²⁴⁾

もちろんプレヴォは、天然痘を予防する種痘無用論を主張しているのではないし、労働者数の増加だけを批判しているわけでもない。人口抑制を病気による死亡に求める見解に反対しているのである。病気の罹患は労働者階級に、より多くみられるからであるし、逆に病死を減少させてもそれは労働者の困窮を拡大することになるからである。プレヴォは人口抑制を病気や病死に結びつけることに反対しているのである。それは、この論文の結論部分で次のように述べられていることから分かる。

「最後に死亡の諸原因を減らすことに成功するかもしれない。マルサス氏の思索の目的は、まさしくこの減少にある。ところで、もし人々がいわば死の何らかの原因を予告されれば、もし人々が子供たちの死亡率に何の対応もとらなければ、彼らは彼らの敵に抵抗するための手段を何も利用しないだろう。そして力強い、賢明な、徳の高い解決がそれを抑制するのに十分であるのに、彼らはそれを臆病にもその場所を放棄するだろう。一言で言えば、人口過剰を警告することと、人口を消失させることは別問題である。」²⁵⁾

最後にプレヴォは以下の一節でこの論文を締めくくっている。

「われわれは最後に以下のように考える。すなわち、人口論の教義をもてあそばすに、その有用な適用がなされ、諸個人にそして政府にはなおさら慎重にそれを熟慮させ、そしてこの教義が、普及され、論議され、見識と思

いやりのある人々、悪徳や困窮の情景をひどく悲しむ、とりわけあらゆる種類の哲学が有害な傾向をもつとは考えない人々、あらゆる種類の改善を永久に断念する必要があるとは考えない人々、そのような人々の検討に付されることが強く期待されるということ、である。」²⁶⁾

このようにプレヴォは、すくなくともこの時期にはマルサスの人口論を評価していた。マルサス以前の思想家や経済学者についても、マルサスにつながる叙述や論理を見いだそうとしている。また彼は、マルサスに「敵対」したり、人口は食糧生産高に依存すること、食糧生産には限界があることから人口抑制が不可避であることを認めつつも、その対応策として死にいたる病を持ち出したりすることに反対している。彼が求める人口抑制策は、「力強い、賢明な、徳の高い」解決方法であって、それで人口増加を「抑制するのに十分である」と彼は考えているのである。

なお2点付け加えておきたい。第1に、プレヴォの叙述には人々、とくに貧者や労働者の貧困からの回避ないし脱却を目指す視点が随所に見られることである。マルサス人口論を称賛する背後に、プレヴォのこの立脚点・思想が垣間見えるように思われる。第2に、プレヴォはデュガルト・ステュアートだけでなくジェームズ・ステュアートをよく読み、評価している点である。しかしながらこの点についての検討は本稿の対象範囲を逸脱するので別稿に委ね、ここではその指摘だけにとどめておきたい。

Ⅲ 1810年代のプレヴォ

1796年に刊行が開始された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌（1816年以降は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』に改称した）は、少なくとも当時のジュネーヴの知識人たちに多大な思想的影響を与えたと推測される。前稿でも触れたように、この雑誌の編集者はマーク＝オーギュスト・ピクテ（Marc-Auguste

Pictet)、シャルル・ピクテ (ピクテ・ド・ロシュモン (Charles Pictet (Pictet de Rochumont))、それにフレデリック＝ギヨーム・モーリス (Frédéric-Guillaume Maurice) であった。ピエール・プレヴォは編集者ではなかったが、積極的な協力者とされている。彼の翻訳や論文が多数同誌に掲載されていることは、その一部を紹介した本稿からも伺えるだろう。彼らが共有する思想は功利主義だった。『ビブリオテーク・ブリタニク』第1号 (1796年) 序文には、「効用原理はわれわれの不変の羅針盤である」²⁷⁾ との記述がある。もちろんデュモン (Dumont, Etienne) も同誌に関わっていた。

H. O. パッペは、プレヴォとピクテは「階級対立を国民経済学のもっとも重要な問題として説明する著者だった」と述べている²⁸⁾。さらにパッペは「プレヴォとシスモンディは興味を分かち持っていた」と述べて、両者が思想上たがいに近いところに位置していたことを指摘しつつも、すぐそれに続けて「しかし彼 [プレヴォ] はシスモンディと同意見ではなかった」²⁹⁾ と指摘している。それは、シスモンディが、技術発展によって機械が労働に置き換わることが相対的過剰人口を生み出す原因になっていると考えていることに対して、プレヴォがそのような考え方を批判した点に関してである。パッペはプレヴォが『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編者シャルル・ピクテに宛てた以下の手紙を引用している。

「シスモンディのような深さをもって考える著者が、多くの思考の果実であるシステムをあえて軽く扱うなんて、そのような誤解になんと驚いたことか…。そして、私が『新原理』に攻撃を仕掛けることを喜んでいると思わないでほしい。壊れやすい基礎の上に良い、高貴な建築物があり、篤志家のペンから出て遅かれ早かれ有益な応用を見いだす価値ある作品がある。

したがって私は、あらゆる農業、工業、知性の発展は非常によいものであるということ、生産のことはおくとしても、それら (発展) は多くの自由と代表的な賢人の協力のおかげで人口の過剰を予告している、と考えて

いる。」³⁰⁾

この手紙に書かれたプレヴォの真意が、農業や工業の発展それ自体はよいことである、なぜならばそれはさらなる人口増加の可能性を拡張し、人々が貧困状態に陥ることを避ける道が開けるからである、ということならば、またもし過剰人口をいうのであればそれは人口と食糧との関係から説くべきである、ということであるならば、前節で見たプレヴォのマルサス人口論に関連する諸見解と軌を一にすることになる。この点はおそらく否定できないであろう。

しかし同じくパツベが指摘するように（そして筆者の前稿でも触れたように）、この点がセー法則との関係で捉えられたときに、プレヴォはシスモンディと共通の土俵にたっていたと言える。プレヴォは、マーセット婦人の『経済学問答』に関連して、「マーセット婦人の本は、シスモンディと多くの共通点を持っている。しかしながら彼女がシスモンディと意見が一致するのはまれであった。…マーセット婦人は、富の追求と一般的福祉との間の満足すべき均衡を見いだすことを信じていた」と指摘し、キャロラインとマダム B との間の会話を引き合いに出した上で「これに対してプレヴォは、そのような『経済学と道徳との間の貴重な接近』に、まだ究明されていない深さ、洗練された分析的透視を必要とする深さが隠れていると見る」と指摘して、以下のプレヴォの論述を引用している。

「諸結果を評価するために、他の諸科学で何回も成功した方法、極端に仮定を立てるという方法を、ここで適用することはできないのだろうか？ もし労働がすべての分野で単純化の最後の用語に用いられたら、どうなるのだろうか？ すべてが非常に短い時間で容易に生産され、需要は全体として増加し、われわれが注解を加えるテキストの論理にしたがって、生産は需要に比例するだろう。そして、労働の容易さにもかかわらず、より多くの労働者が活動することになるだろう。その結果は、労働者の食糧、衣服、住まいが改善するということになるのだろうか？ 一多分。一何の疑いも

なく、富者はあらゆるものに満ちあふれている。この豊かさのなかで貧困な部分は、彼らが現在そうであるよりもはるかに多かったということは、あまり確実ではない。それはちょうど、印刷所の印刷工やあるいは綿工場の労働者が、手作業の筆耕者や紡績工よりもより良く処遇されているようなものである。様々な形態で表現されるこの観察は、富の理論をつくっても幸福の理論はつくれないうことを十分に表現している。」³¹⁾

これに続くパッペの以下の叙述が興味深い。

「労働の合理化、それは分業を通じてであり、機械化を通じてであり、そしてその結果は、セー法則への懐疑。われわれはここでシスモンディ固有の領域にいる。これらの問題は、すでに1816年にプレヴォの心を捉えていた。シスモンディは、イングランドでのみ起こったのではなく、ジュネーヴの哲学者たちをも活発に取り組ませた論争に関わっていたのである。デュモンだけではなく、マーセットとプレヴォもまたこの場所を占めていたのである。」³²⁾

1816年は、イギリスにおける経済の混乱（「過渡的恐慌」）の直後である。資本主義経済における再生産過程の攪乱という初めての経験に強く影響されたのは、シスモンディだけではなかった。マルサスとの距離がどうなったかは別にして（上掲したプレヴォの手紙との絡みで見れば、おそらくマルサスを前提にしつつ）、プレヴォもやはりイギリス経済の実態から大きな衝撃を受けたに違いない。

おわりに

たしかにプレヴォは、D. ステュアートやマルサスからの影響を後年にいたるまでひいていたと言えるだろう。しかし、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちを始め、シスモンディを含めたジュネーヴの知識人たちとの交流を

通じて、彼の思想の根底には同誌の「不変の羅針盤」としての功利主義が根強く息づいているように思われる。それはなにも短時日のうちに形成されたものではなく、本稿第I節でも触れたように救貧法に強い関心を抱くなど、プレヴォ思想が基本的に立脚する基盤に位置づけられるのではないかと思われる。

シスモンディ経済学の基軸のひとつと筆者が見なしている「分配の平等の必要性」という論点も、このような知的環境のなかで形成されたはずである。それだけではなく、プレヴォもシスモンディも、単にジュネーヴあるいはスイス・ロマン地方の知性にのみ育まれたものでももちろんなく、スコットランドやイングランド、それにフランスやドイツ・イタリアといった広大な知性の交流が生み出した結晶であるといえよう。

（注）

- 1) このときプレヴォによって翻訳出版されたのは、全3巻のうち第1巻および第2巻である。第2巻の巻末にはD. ステュアートの *Outlines of Moral Philosophy*, Edinburgh, 1793の抄訳 (EXTRAIT DE L'ESQUISSE DU COURS COMPLET DE PHILOSOPHIE MORALE DE Mr. DUG. STEWART.) が加えられている。なお、第3巻の仏語訳は1845年にパリのL.HACHETTEから出版されている。
- 2) In *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31, 1806. pp.23-55. ところで、プレヴォの伝記を書いたカンドルやシェルビュリエに依れば、プレヴォはD. ステュアートの翻訳を1807年11月から翌年2月までのわずか3ヶ月間で完成させたと指摘しているが、『ビプリオテーク・ブリタニク』誌には、*Element of the philosophy of Human Mind* の翻訳 *ÉLÉMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L'ESPRIT HUMAIN* が1806年の第31巻から同年の第33巻まで断続的に連載されている。一方、カンドルやシェルビュリエは、プレヴォはマルサスの翻訳を1808年3月から9月までの6ヶ月間で完成させたと指摘している。(Candolle, A.-P. de, *NOTICE SUR M. PIERRE PREVOST. Professeur émérite à L'Académie de Genève.* (Tiré de la Bibliothèque universelle de Genève.), Avril 1839, p.8 および Cherbuliez, A, *DISCOURS SUR LA VIE ET LES TRAVAUX DE feu*

Pierre Prevost, ANCIEN PROFESSEUR DE PHILOSOPHIE À L'ACADÉMIE DE GENÈVE. Prononcé à Genève, à la Cérémonie des Promotions, le 12 Août 1839, p.50.)

- 3) この抄訳の本文には署名がないが、脚注に (P.P.p) というプレヴォの署名があるからである。なおこの抄訳のタイトルは DE LA NATURE PROGRESSIVE DE L'HOMME となっている。
- 4) Candolle, *ibid.*
- 5) Pierre Prévost, *ÉLÉMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L' ESPRIT HUMAIN. Par Dugald STEWART, TRADUIT DE L' ANGLAIS Par Pierre PREVOST, 1808. p.vii.*
- 6) *ibid.*, pp.vii-viii.
- 7) *ibid.*, p.ix.
- 8) 1809年に出版されたピエール・プレヴォ訳マルサス『人口論』は、1807年に出版されたマルサスの第4版の仏訳である。これらの事情については、喜多見洋氏「マルサス人口論のフランス語世界への波及」永井義雄・柳田芳伸編『マルサス人口論の国際的展開 —19世紀近代国家への波及—』2010年、に詳しい。
- 9) *ESSAI SUR LE PRINCIPE DE POPULATION, OU Exposé des effets passés de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne. Par T. R. Malthus, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST, 1809. p.vii*
- 10) *ibid.*
- 11) *ibid.*, pp.viii-ix.
- 12) Pierre Prévost, QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION In *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31, 1806. pp.23-24.
- 13) *ibid.*, p.24.
- 14) *ibid.*, p.26.
- 15) *ibid.*, p.27.
- 16) *ibid.*, pp.27-28.
- 17) *ibid.*, pp.30-31.
- 18) *ibid.*, p.32.
- 19) *ibid.*
- 20) *ibid.* pp.34-35.
- 21) *ibid.* p.36.
- 22) *ibid.*, p.42.
- 23) *ibid.*, p.44.

- 24) *ibid.*, pp.51-52.
- 25) *ibid.*, p.54-55.
- 26) *ibid.*, p.55.
- 27) *Bibliothèque Britannique*, Nr. 1, 1796. p.6.
- 28) H. O. Pappé, *Sismondis Weggenossen*, 1963. p. 64.
- 29) *ibid.*, 73.
- 30) *ibid.* パッペはこれを『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』第14号（1820）、p.22およびp.26から引用している。
- 31) *ibid.* p.78. これは『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』第2号（1816）、p.352からの引用である。
- 32) *ibid.*

（参考文献）

- Candolle, A.-P. de, *NOTICE SUR M. PIERRE PREVOST. Professeur émérite à L'Académie de Genève.* (Tiré de la Bibliothèque universelle de Genève.), Avril 1839.
- Cherbuliez, A, *DISCOURS SUR LA VIE ET LES TRAVAUX DE feu Pierre Prevost, ANCIEN PROFESSEUR DE PHILOSOPHIE À L'ACADÉMIE DE GENÈVE. Prononcé à Genève, à la Cérémonie des Promotions, le 12 Août 1839.*
- Pappé, Hellmut Otto, *Sismondis Weggenossen*, 1963.
- Prevost, Pierre, QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION. In *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31, 1806.
- , *ÉLÉMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L'ESPRIT HUMAIN. Par Dugald STEWART, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST.*, 1808.
- , *ESSAI SUR LE PRINCIPE DE POPULATION, OU Exposé des effets passés de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne. Par T. R. Malthus, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST,* 1809.
- 喜多見洋 「マルサス人口論のフランス語世界への波及」永井義雄・柳田芳伸編『マルサス人口論の国際的展開 —19世紀近代国家への波及—』, 2010年12月。
- 中宮光隆 「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号。2009年3月。

——, 「ピエール・プレヴォの生涯と業績」『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号。2010年3月。

(本稿は、平成22年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号20530170)による研究成果の一部である。)